



**Data** 2023-71

監督: 是枝裕和  
脚本: 坂元裕二  
音楽: 坂本龍一  
出演: 安藤サクラ/永山瑛太/黒川  
想矢/柗木陽太/高畑充希  
/角田晃広/中村獅童/田  
中裕子

## 👁️👁️ みどころ

今や是枝裕和監督はカンヌの常連で、顔。『誰も知らない』(04年)、『万引き家族』(18年)に続いて、彼の快拳が！そう思っていたが、今回は坂元裕二が脚本賞をゲット！これは、役所広司の主演男優賞と共に邦画界の快拳だが、是枝監督にとっては喜びも半分・・・？

そんな下衆の勘繰りはともかく、絶賛ぞろいの評論の中、キネマ旬報6月下旬号の「REVIEW 日本映画&外国映画」における、井上淳一氏の星1つの採点と「いつも以下の是枝映画。海外もいい加減、有り難がるのをやめたら。」という“ボロクソ評論”にも注目！

“羅生門方式”に基づく母親の視点、教師の視点はわかりやすいが、第3章の2人の子供たちの視点は複雑かつ難解！あなたはどう理解する？本作は同時に「クィア・パルム賞」＝「LGBTQ賞」も受賞したが、それは一体なぜ？本作第3章に見る、子供たちの視点によるLGBTQとは？そんな中で徐々に明らかになる“怪物”の正体とは？

脚本を含めた本作の“本当の良し悪し”はあなた自身の目でしっかりと！

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■カンヌで2つの邦画が脚本賞と主演男優賞の快拳！■□■

2023年5月に開催された第76回カンヌ国際映画祭では、2つの邦画が快拳を成し遂げた。第1は、ヴィム・ヴェンダース監督の『PERFECT DAYS』(23年)に主演した役所広司が主演男優賞を受賞したこと。カンヌ国際映画祭で日本人俳優が主演男優賞を受賞するのは、第57回の是枝監督の『誰も知らない』(04年) (『シネマ6』161頁)での柳楽優弥以来2人目だ。

第2は、本作の脚本を書いた坂元裕二が脚本賞を受賞したこと。是枝監督は自分が監督

する映画の脚本は自分で書くのが常だが、本作については、川村元気プロデューサーの提案で、はじめて是枝裕和監督×坂元裕二脚本のコンビが実現した。坂元裕二氏について、是枝監督は「もし自分で脚本を書かずに、誰かと組んで映画を作るなら、坂元さんしかいないという話は前からしていました。」と語っているから、まさにこの組み合わせはゴールデンコンビだ。

もっとも、『万引き家族』（18年）（『シネマ42』10頁）で自ら脚本を書き、第71回カンヌ国際映画祭で最高賞のパルムドール賞を受賞している是枝監督にしてみれば、いくら「今一番リスペクトしている」脚本家とはいえ、本作がカンヌで2度目のパルムドール賞を受賞できず、坂元裕二が脚本賞を受賞しただけ、というのは少し不満かも・・・？

そんな下衆の勘繰り（？）はともかく、私が興味深いのはキネマ旬報6月下旬号の「REVIEW 日本映画&外国映画」における、『怪物』、『波紋』（23年）、『渇水』（23年）についての井上淳一氏、古賀重樹氏、服部香穂里氏の評価。古賀氏はすべて星4つ、服部氏はすべて星3つと評価が均一だが、井上氏だけは『渇水』を星5つ、『波紋』と『怪物』を星1つと評価。しかも『怪物』についての評論は“ボロクソ”で「いつも以下の是枝映画。海外もいまい加減、有難がるのをやめたら。」とまで書いているから、ビックリ！

## ■□■羅生門方式とは？第1、第2の視点は？■□■

巨匠・黒澤明監督の名作は時代劇、現代劇を問わず多いが、三船敏郎主演の『羅生門』（50年）は“羅生門方式”で有名。これは、「目に見える事実は必ずしも1つではなく、見る人間や視点によっていろいろあるものだ」ということをスクリーン上に提示するもので、「同じ出来事を複数の登場人物の視点から描く手法」だ。

『羅生門』では、“ある殺人事件”と“ある強姦事件”を巡って、数名の関係者がそれぞれ異なる証言をする中、事態が少しずつ混迷の度を深めていく姿が描かれていたが、これは、弁護士歴50年近くになる私に言わせれば“当たり前の話”。しかし、それが巨匠の演出でスリリングにスクリーン上に描かれると、観客の目には新鮮に映るわけだ。去る5月29日にオンラインで視聴した、18歳の少年が台湾の夜市で引き起こした無差別銃乱射事件を描いた台湾映画『ガッデム 阿修羅』（22年）も、一種の羅生門方式によるものだった。その評論で私は「もしクレオパトラの鼻がもう少し低かったら」という“歴史上のif”の興味深さを提示したが、“羅生門方式”を採用した本作における3つの視点とは？

## ■□■こんな教師かなわん！校長もダメ！それが母親の視点！■□■

昔は「でもしか先生」という言葉があった。ウィキペディアによると、これは「日本各地において学校の教師が不足していた第二次世界大戦終結から高度経済成長期（おおむね1950年代から1970年代）に教師の採用枠が急増し、教師の志願者のほとんどが容易に就職できた時代に、他にやりたい仕事がないから「先生でもやろう」あるいは特別な技能がないから「先生にしかできない」等といった消極的な動機から教師の職に就いた、無気力で不活発な教師に対する蔑称」だ。そして、本作に見る教師・保利道敏（永山瑛太）

はまさにそれ。

羅生門方式で構成された本作の第1章は、シングルマザーながら懸命に子どもの成長を見守ろうとする母親・麦野早織（安藤サクラ）の視点から、暴力教師の実態や責任のすべてを保利に押し付けてしまおうとする校長・伏見真木子（田中裕子）を中心とする、なんとも呆れた学校の実態が、是枝監督の見事な（誘導的な？）演出によって浮き彫りにされていく。「こんな教師かなわん！」と思うのは、湊（黒川想矢）の母親・早織だけではなく、観客も同じ。弁護士の私に言わせれば、そこでの本当の問題は、アメリカのトランプ前大統領がよく口にしてきた「フェイク！」かどうかなのだが・・・。

### ■□■いい教師じゃん！問題は、学校とこの母親に！？■□■

第1章から一転して、第2章になると、意外にも保利は子供（生徒）思いのいい教師じゃん！という姿が少しずつ見えてくる。同じクラス内でも生徒同士のケンカがあるのは当然だから、それを止めに入った教師が、弾みでその腕を生徒の顔にぶつけることだってあるだろう。そこでは「ごめん、ごめん！」と謝って、もし鼻血でも出していけば、治療すればいいだけだが、それが、あれこれと尾ひれをつけられて、ねじ曲げられた情報になって公開されていくと・・・？

保利のような、どこにでもいる生徒思いの教師（？）の目から見ると、何かと自分の息子の立場ばかり主張して学校に乗り込み、校長に文句をつけてくる早織のような母親はいわゆるモンスターペアレント！保利は独身だから、恋人かガールズバーの女か否かは別として、私生活上、鈴村広奈（高畑充希）のような女の影があっても不思議ではない。もっとも、鈴村の目から見ても保利はそれほど魅力的な男ではなく、結婚の対象にはならなかったようだが、保利にしてみれば、そんなことまでモンスターペアレントからいちゃもんをつけられるいわれはないはずだ。すると、羅生門方式による本作の第1章と第2章を見終えた後のあなたの“怪物”度判定は如何に？

### ■□■第3章は子供の視点！しかし、こりゃ複雑・難解だよ！■□■

私の小学生時代にも“いじめ”（らしきモノ）はあったが、それは大っぴらだったから、昨今、世界中で問題になっている小学生の“いじめ”とは全く異質なものだった。小学生時代の私は勉強、スポーツ、歌、その他何でも優等生だったが、正直に告白すれば、気に入らない女の子に対するあれこれのいじめめいた行動も・・・？昭和30年代（1950年代）の日本では、その程度のことが問題にされることはなかったが、本作の第3章で描かれる“子供の視点”からの、あの事実、この事実とは？

『羅生門』の“羅生門方式”は、ある1つの殺人事件と強姦事件を当事者を含む関係者の視点から描いていた。しかし、同じく“羅生門方式”で構成された本作第3章で小学校5年生の麦野湊と同級生の星川依里（柗木陽太）という2人の子供たちの視点から描かれる事実の多くは、母親の早織も教師の保利も全く知らないことだから、少し違和感がある。その最たるものは、2人だけで遊ぶ秘密基地に関する事実だ。しかし、これは2人だけが

知っている事実で、早織も保利も全く知らない事実だから、これらを全部ひっくるめて“羅生門方式”と言っているの？私にはそんな疑問が・・・。

本作の舞台になっている長野県諏訪市の“ある町”は、山を背後に大きく澄んだ湖を望む郊外に位置しており、数年前には、市の合併の影響から町の中を通っていた路線が廃線となり、錆びた線路と緑に覆われた駅が打ち棄てられたらしい。本作のパンフレットのプロダクションノートによると、そんな廃線跡地を探すのに苦労したそうだが、長野県諏訪市にそれを発見した後は、是枝監督のイメージがどんどん膨らんでいったらしい。その甲斐あって、第3章で描かれる2人の子供が遊ぶ秘密基地の描写は秀逸だ。“オペラ座”の“怪人”はオペラ座地下の隠れ家に住んでいたが、本作に見る秘密基地に住む怪物とは？第1章と第2章では、スクリーン上に登場してくる事実（視点）がわかりやすかったのに対し、第3章のそれは極めて複雑かつ難解だから、それはあなた自身の目でしっかりと。

### ■□■クィア・パルム賞（LGBTQ 賞）も受賞！それはなぜ？■□■

あなたは“LGBTQ 賞”を知ってる？また、本作がこれを受賞したことを知ってる？LGBTQ 賞とは、カンヌ国際映画祭の独立賞の1つで、LGBTQ を扱った映画に与えられる「クィア・パルム賞」のことだ。このクィア・パルム賞は2010年に創設され、公式部門とは別に組織され、映画監督や俳優、各国のクィア映画祭のプロデューサーらが審査員を務めるそうだ。また、これはカンヌ国際映画祭に出品された作品から選ばれ、今回は満場一致で本作に決まったそうだ。しかし、『怪物』と題された本作がなぜ、そんな賞を受賞したの？

本作第1章では、保利から「あなたの息子さん、イジメやってますよ。家にナイフとか凶器とか持ってますか？」と言われた早織が、思い切って湊がいじめているという依里の家を訪ねると、依里の腕に火傷の跡があったからビックリ！もっとも、依里は校長たちに「湊にイジメられたことはない」と証言し、さらに「保利が湊を叩いている」と告げたから一安心していたが、その実態は？親がモンスターペアレントなら、その小5の子供たちはそれ自体独立した怪物に？しかも、LGBTQ は、今や成人だけの特権ではなく、中高生はもとより小学生だって5年生にもなれば・・・。

本作のパンフレットには、湊役にオーディションで選ばれた子役の黒川想矢が「最初は難しそうだなと思いました。男の子同士が好きになるのは僕にはわからないことでもあったので。」「でも面白い映画だと思ったし、ちょっと楽しみな感じもありました。」と語っているが、なんとも早熟なことだ。さあ、本作第3章の、子供たちの視点による、いじめをはじめとするさまざまな事実の描写は前述した通り複雑かつ難解だが、クィア・パルム賞を受賞した“LGBTQ の物語”とは・・・？

2023（令和5）年6月14日記